作家は二度は読まれない

螢里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
作家は二度は読まれない

【Ｎコード】
Ｎ２４５４ＢＡ

【作者名】
螢里

【あらすじ】
物語との新たな出会いを求め、寄った本屋の帰り道に、少女は自分をつける足音の存在に気がつく。
振り向くと、そこには本屋で見かけたクラスメイトの姿があった。
鈍感な少女と気の小さい少年の物語になっています。

私が好きになったものは、風化する。食べ物も、人も、場所も。
小説には、特に強くそれを感じてしまう。初めて読んだときは感動の連続だったストーリーも、しばらく経てば残るのは物語で起きた出来事だけで、抱いていた感情など何処にもなくなってしまう。
声が出そうになるほどの狂おしい胸の高鳴りが忘れられない私は、渇きを満たすべく新たな物語を求め始める。過去に読んだ物語を読み返すことはない。既視感とともに二十ページも読めば、あらすじを思い出してしまい、苦痛で堪らなくなるからだ。一度読んだものに私の求めているものはない。
だから、私は今日も最寄の古本屋を訪ねていた。校則で禁止されているバイトをする勇気もやる気もない私に、安くて品揃えの良い大手の古本屋は強い味方だ。
控えめに流行りらしい曲がかかっている店内をうろつきながら、特に当てのない私は、何か目を引く本はないかと探す。
「あっ」
時代小説のコーナーの棚を眺めていると、隣から奇妙な声がした。見るとそこには、池波先生の剣客モノの小説を持った小野が立っている。
「ななっ、なんでお前がこんなとこに居んだよ！」
小野の姿は、長身にもかかわらず、なんというか小動物が精一杯の虚勢を張る様に似ている。いつも思うが、どうしようもなく挙動不審な奴だ。制服のままのところを見ると、私と同じく部活が終わってから直接ここへ来たらしい。
「何って本探しに来たんだけど」
「あ、そっか」というような分かりやすい顔をしてから深呼吸をしている小野を置いて、ハードカバーのコーナーへ急ぐ。
「ちょと、ま――」

先程の大声でこちらを向いたレジを待つ人たちからの好奇の視線には耐えられなかった。

小野を放置して一時間ほど店内を散策し、何とはなしに三冊ほど買ってから古本屋を出た。めぼしいものが見つからないと、特に欲しくもない本を買ってしまうのは私の悪い癖だ。

日はとうに暮れてしまっている。店に長時間居たのだから当然だろう。本を仕舞った鞄を片手に、頼りない町の明かりを頼りに帰路につく。

吐く息が白い。春はまだまだ先だ。季候は嫌いじゃないが、油断するとすぐ手が老婆の手になるので、冬には早くどっかに行ってもらいたい。

雲のない空にオリオンが輝いている。中学時代、塾の帰りに偶然見つけて以来、私の数少ない変わらず好きなものの一つだ。もうすぐオリオンの肩に位置するベテルギウスが爆発するなんて話を聞いたが、私が死ぬまでくらい待ってもらいたい。

ぼんやりと空を眺めながら歩いていて、不意に背後から足音がするのに気がついた。近づいてくるでも、遠ざかるでもなく、足音は一定の距離を保って聞こえてくる。

試しに歩みを速めてみた。すると、足音も間隔が短くなる。どうやらこちらをつけているようだ。

最近見た殺人事件の記事が頭をよぎる。こういう場合は振り向くべきなのだろうか、それとも助けを呼ぶべきなのだろうか。

どうすれば良いか分からず、とにかく走りだした。

足音が追ってくる。距離はどんどん縮まり、相手の息遣いが聞こえてきた。どうやら、若い男のようだ。

悲鳴を上げそうになったところで、肩を掴まれ、強引に振り向かされた。

「待ってくれ！」

外灯の下で、目の前にあったのは赤みを帯びた小野の顔だった。

気が抜けるのと同時に、怒りがこみ上げてくる。
「や、やっと止まった」
乱れた息を整えている小野に、可能な限り冷たい視線をくれてやる。遅れて気づいた小野は僅かに一歩退いた。
「人の後をつける趣味でもあるの？」
「い、いや」
一時間以上古本屋に居たのだ。方向が同じでもストーカーとしか思えない。
「じゃあ何なの？」
「話があるんだ」
そんな機会なら古本屋でいくらでもあったはずだ。それに、追いかけてくるにしたって一声かけてくれればもっと対応のしようがあったはずなのだ。どうしてこうも不親切なのだろうか。
「俺の話、読んでくれたか？」
勢いといきなりの質問に、思わず頷いてしまった。「俺の話」というのは、恐らく二日前に製本作業を終えた部の文芸誌に載せた話だろう。
途端、小野が晴れやかな顔つきになった。
「そうか。じゃあ俺と付き合ってくれ！」
すかさず手を突き出す小野を前に、私は固まってしまった。「シチュエーション」という言葉が浮かんだが、そんなものはどうでもいい。今の問題は、どうすれば話を読んだこととこの告白が繋がるのか、ということだ。
私の反応に状況を察したらしい小野が恐る恐る聞いてくる。
「お前、俺の話……読んだんだよな？」
「うん」
確かに私は二日前に文芸誌を持ち帰り、部員の話に一通り目を通している。
「じゃあ」
「あ」

唐突に合点がいった。小野の話は恋愛モノだったのだ。それも、高校生の主人公が、クラスメイトから距離を置くある女生徒への思いを散々連ねた後に、告白し、付き合うことになるというベッタベタのものだ。正直あまり面白くなかったので、適当にしか読んでいない。だが、導き出される答えは一つしかないだろう。

「あれって……私？」

今、私の前には灰となった級友の姿がある。

「ああ……」

それだけ言うと、小野は私に背を向けて家とは真逆の方向へ歩き出した。引き止めようにもかける言葉が見つからない。

おぼつかない足取りで小野は夜の闇へと溶けていった。

そこからの帰り道には奇妙な浮遊感が付きまとった。

どのくらいの時間が経ったのかも分からないまま家に着き、手洗いや着替えなど一区切りをつけて、自室の机に置かれた文芸誌を手に取った。

夕食にはまだ時間がある。椅子に腰掛け、小野の話が載ったページを開いてみた。『彼女はアネモネだった』なんて言葉で話は始まっている。どうすれば良いんだろう。

話を読み進めていく。そこに私の求めた胸の高鳴りはない。だが、既に読み終えたはずの物語には、新たな発見への喜びと驚きが確かにあった。

（後書き）

深夜、新学期が始まってしまうことへの憂鬱な気分に任せて書き始めたら、気がつけば徹夜に近いことになってしまいました。冬休みの間に生活リズム崩れまくってます。

さて、ここまで読んでいただいた皆様にお詫びを一つ、あらすじに「本屋」と書きましたが、本屋は本屋でも「古本屋」です。本当に申し訳ありません。あらすじに「古本屋」なんて書いてしまうと雰囲気も何もなくなってしまう気がしての所業です。お許しを。

最後に、深夜のテンションで書き上げたものですので、思考回路が麻痺しています。

おかしな文章等がありましたらご報告お願いします。

時間があるときに修正を加えます。そのときは後書きにも手を加える形で報告したいと思います。

←分かりやすいように。

修正なしです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2454ba/

作家は二度は読まれない

2012年1月6日06時48分発行